

会 議 録

会 議 の 名 称	平成26年度第2回ひろさき教育創生市民会議
開 催 年 月 日	平成26年10月16日(木)
開 始 ・ 終 了 時 刻	午後2時 から 午後4時30分 まで
開 催 場 所	中央公民館岩木館 大ホール(弘前市大字賀田一丁目18番地3)
座 長 の 氏 名	弘前大学教育担当理事・副学長 伊藤成治
出 席 者	座長 伊藤 成治 委員 生島 美和 委員 河内 見地子 委員 関谷 道夫 委員 佐藤 文紀 委員 山形 明雄 委員 田村 瑞穂 委員 立石 眞樹 委員 福嶋 等 委員 前田 一隆 委員 虻川 士 委員 高山 洋子 委員 大湯 恵津子 委員 三上 美知子 委員 野村 太郎 委員 小田桐 慶二 委員 斎藤 富美子 委員 鶴谷 郁子 委員 久保杉 嘉衛 委員 増田 幸雄 委員 九戸 眞樹 委員 三浦 テツ 委員 濱野 麗 委員 境 江利子 委員 工藤 雅弘
欠 席 者	委員 滝本 壽史 委員 相内 英之 委員 山中 徹 委員 高橋 康雄 委員 村元 正彦 委員 梅村 博之 委員 笹 郁子
事 務 局 職 員 の 職 氏 名	教育長 佐々木 健 教育部長 柴田 幸博 学校教育推進監 工藤 雅哉 教育政策課長 櫻庭 淳 学校企画課長 北嶋 郁也 学務健康課長 鳴海 誠 学校指導課長 佐藤 忠浩 学校企画課長補佐 中田 和人 学務健康課長補佐 須郷 雅憲 生涯学習課長補佐 野呂 智子 中央公民館長 庄司 輝昭
会 議 の 議 題	グループ別による討議 1 「学校の活動へもっと大人を巻き込むには？」 2 「開かれた学校を推進するには？」 3 「放課後や休日における地域の教育力をどう活用していけばよいか。」 4 「少子化に対応した学校のあり方はどうあればよいか。」
会 議 結 果	下記の会議録のとおり

<p>会議内容</p> <p>(発言者、発言内容、審議経過、結論等)</p>	<p>1. 開会</p> <p>2. 座長挨拶</p> <p>3. 議事</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 討議の進行に関する説明 ・ グループ討議 <p>4. 閉会</p> <p>【内容】(概要)</p> <p>○座長挨拶</p> <p>伊藤座長より、「少人数による討議ということもあり、これまでになかった活発な議論がなされることを大いに期待しているところであるが、議論が深まることで新たな疑問や課題が見つかることもあるかと思われる。そのような意味では、事務局に対する事業の提案にこだわらず、今後につながる議論をしていただければと考えている。」という挨拶がありました。</p> <p>○議事(グループ討議)</p> <p>テーマ1「学校の活動へもっと大人を巻き込むには？」</p> <p>座長役：大湯恵津子</p> <p>メンバー：河内見地子、立石眞樹、福嶋等、三浦テツ</p> <p>>学校活動への参加の現状及び課題とは。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 地域において参加を促すための取り組みがされていない。 ・ P T A活動が衰退してきている。 ・ 個人として学校との関わりを持ちたいと思っても、敷居が高くて入り込めない。 <p>>学校活動への参加を活発にするためにはどうしたらよいか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 地域に強力なリーダーの存在が必要である。 ・ 学校と地域のパイプ役として、学校評議員や社会福祉協議会、体育協会などの地域の団体を活用することも効果的である。 ・ 受け入れる側の学校の意識も重要なのではないか。 ・ 学校と地域の一層の信頼関係の構築が必要となるのではないか。 <p>>今後、どのように取り組んでいけばよいか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ まずは町会長がリーダーシップを発揮することが必要である。そして、継続的に取り組むためには地域のリーダーとなるべき後継者を育てていくことが大事である。 ・ 学校と地域の信頼関係を築くために、町会関係者や民生委員などが足
--	--

しげく学校を訪問したり、地域活動の際に学校に参加を呼び掛けるなど、地道な取り組みが必要である。

- ・学校間によって受け入れる意識に温度差が生じないよう、教育委員会としてしっかり取り組んでほしい。

テーマ2「開かれた学校を推進するためには？」

座長役：山形明雄

メンバー：関谷道夫、田村瑞穂、虻川士、斎藤富美子、増田幸雄

>学校が開放されていないと思われる理由はどこにあるのか。

- ・地域との密着度の違いにより感じ方が異なるのではないか。そういう意味では小学校と中学校では密着度は異なっていると思う。
- ・学校はいろいろなことに関して「管理」という意識が強くなってきているのではないか。
- ・学校は基本的に変わっておらず、むしろ地域住民の意識の違いから感じられることなのではないか。
- ・学校側からの情報発信について、悪いことも含め正確に発信してほしい。
- ・以前に比べて学校側からは積極的な情報発信に努めているが、ネガティブな情報については出しにくいことが多い。

>学校の安全確保について。

- ・学校に来てほしくない人を防ぐには「管理」という考えは必要だと思う。
- ・朝の挨拶や声掛けに関する活動は子どもたちの見守りの点からもとてもいい活動であると感じる。
- ・子どもたちや学校の安全に関する様々な取り組みについて全体を把握し、必要があれば見直していくべきである。

>その他の意見につて。

- ・若い世代の保護者は自分たちの生活が精一杯であるために、学校に協力できないのではないか。
- ・学校活動に対するボランティア募集を行っても、地域からの参加がなかなか望めない。
- ・学校行事を通じて3世代が集まり、交流する場があればいいのではないか。

テーマ3「放課後や休日における地域の教育力をどう活用していけばよいか。」

座長役：生島美和

メンバー：前田一隆、野村太郎、鶴谷郁子、久保杉嘉衛

濱野麗、境江利子

>町会、NPO、教育委員会などが主催する事業への参加者が少ないのはなぜなのか。

- ・開催に関する周知が不十分なのではないか。
- ・部活動やスポーツ少年団、習い事、家族との外出など、子どもたちにも時間的な余裕がないのではないか。
- ・子どもも大人も一人では参加しにくい。そういう意味では、周囲を巻き込み牽引するキーパーソンが少ないということもあるのではないか。
- ・子どもたちが参加したいと思っても、送迎する親も都合もあるかと思う。そうした時に、親同士のネットワークやコミュニケーション能力も必要になってくるのではないか。

>そもそも地域の教育力とは何か。そしてどうあるべきか。

- ・学校教育では得られないものを提供することができる力なのでは。
- ・子どもから大人まで、幅広い年齢層が交流することができる場。
- ・異年齢の交流の中で、大人同士が交流し、そして学ぶ姿を見せられる場である。
- ・地域の教育力が生きる場の一つとして「ねぶた」がある。異年齢が集まり、一つのものを作り上げるだけでなく、その過程を通じてコミュニケーションを図ったり、青少年の育成や郷土愛を育んだりすることができる。
- ・「地域」の定義としては基本的に小学校区もしくは町会となるのではないか。
- ・親同士のネットワークの延長上に地域のネットワークが構築されていくはず。それぞれのネットワークが閉鎖的にならないよう、また、させないようにすることも大事だろう。

>地域の教育力の活用について。

- ・地域が持っている教育力を有効に活用するためには、その情報の共有や発信に関して工夫が必要になるのではないか。
- ・大人同士のコミュニケーションを活発にすることであったり、ネットワークを作り広げたりすることも必要だろう。

テーマ4 「少子化に対応した学校のあり方はどうあればよいか。」

座長役：佐藤文紀

メンバー：高山洋子、三上美知子、小田桐慶二、九戸眞樹、工藤雅弘

>小規模校について。

- ・児童生徒数が少ないと教員数も少ないはずなので、学校行事が大変である。また、集団での登下校が難しかったり、集団活動が制限される。当然、部活動の選択肢も狭くなるだろう。
- ・大規模校だと学校が荒れ、小規模校だと学校が穏やかであるとは限らないのではないか。
- ・複式学級にはメリットがある一方でデメリットもある。
- ・子どもたち同士が、勉強も運動も切磋琢磨できる環境が必要。

>学校の統廃合について。

- ・複式学級や児童生徒数減少だから統合という考えでなくても良いのではないか。
- ・大規模校の生徒に小規模校へ移ってもらうなど、大胆な発想の必要。
- ・地域コミュニティが強い地域は、他の地域と一緒にいたいという傾向があるのではないか。
- ・第一大成小学校と第二大成小学校については、保護者が1学級2クラス以上を望み統合した経緯がある。
- ・小規模校同士の合同行事を増やし、統合の良さを実感してもらってはどうか。
- ・統合によるメリットをもっと住民にも示すべきである。そのためにも学校間の連携が必要だろう。
- ・既存の学区を単に統合するのではなく、学区再編の結果による統合という考えで進められないか。
- ・児童生徒数の推移だけで統合するのではなく、弘前市ではこういう教育ができる。だから学校の設置はこのようにするといった考えが先なのではないか。

>通学区域について。

- ・小学校においては徒歩で通学できる距離に学校があったほうが良い。
- ・周辺地域にある学校の学区は非常に広いので、通学が大変なはずである。
- ・二つ以上の異なる中学校へ進学する小学校については、学区を見直しても良いのではないか。
- ・必ずしも学校が地区の中心にあるとは限らず、隣の学校が近いという場合もあるはず。ある程度自由に学校を選択できるようなことがあつ

ても良いのではないか。

- ・町会が高齢化による人手不足などの問題を抱えている。町会再編も視野に入れてはどうか。
- ・学区と町会は密接につながっており、一つの町会を学区で分けるのは難しいと思われる。

>教師について。

- ・学校によっては教員数が足りなく苦勞しているため、増員してほしいと思っているがそのようにはならない。県費負担教職員に頼らず、市費負担による補充をしてはどうか。
- ・退職教員の再任用で対応できないものか。
- ・専門教科に対応した教員が配置されていない学校をカバーするため、複数校をカバーする教員を配置する取り組みが必要。

>その他

- ・人口減少は女子が地元に残らないことが大きな要因であるとするならば、女子が地元に残りたいと思い、実際に残ることができる環境づくりが必要である。

○座長まとめ

いつにもまして具体的な議論が行えて良かったのではないか。

どのテーマにおいても、地域と学校が切っても切れない大事な関係性にあるということが共通の話題であったかと思う。また、町会というものが核になるということが改めて確認できたのではないか。

リーダーの育成というのは非常に難し課題であると思うが、身近な人間関係の中で引き受けてくれる方が出てくる環境づくりが必要なのだと思う。

教育委員会だけではなく、学校関係、町会関係等、それぞれの立場ですぐできるものがあればとりかかってほしい。

教育は何より身近な行政であると感じた。

本日の内容について、事務局が整理後に委員に配布するので、意見、要望を寄せてほしい。事務局側はこれらの意見要望を行政運営に生かしてほしい。